●事例紹介●

イタリアにおける音楽学生の生活事情

諸田　広美
（東京芸術大学大学院修士・オペラ科（二年））
解説・林　康子
（東京芸術大学大学院教授）

私は、九七年より四年間イタリア・ミラノに留学し、国立ミラノ・ヴェルディ音楽院にて声楽を学びました。その間、私が見てきた現地の音楽学生の生活の様子を紹介したいと思います。

イタリアでは一般に、音楽を専門として学ぼうとする人は、"Conservatorio（コンセルヴァートリオ）（音楽院）"に通います。Conservatorioは、全国に約五〇あり、小中学校課程のある音楽院もあります。声楽だけは、体の成熟が必要なので、一八歳から入学が可能になります。声楽は五年制ですが、楽器によっては全課程が一〇年以上に及ぶこともあります。

全課程を修了した者には"diploma（ディプロマ）（卒業証書）"が与えられます。これは、音楽家として仕事をする上での免許のようなものです。しかし、"privatista（プリヴァティスタ）"といって、diploma取得に必要な学科を個人的に学び、試験のみ音楽院で受験する人も多くいます。問題は、何点でdiplomaを得られたかということで、得るための方法は、正規学生でもprivatistaでも関係ないのです。ただ、正規学生として音楽院に通った方が、試験官が顔見知りの先生ですので、リラックスして試験を受けることができるし、個人的にレッスンを受けることに比べれば、はるかに学費はかかりませんので、音楽院に入学する方が良いでしょう。逆にprivatistaを選ぶ人には、音楽の勉強と平行して大学に通いたい人や、他の仕事をもっている人、年齢のために入学できない人などがいます。

よって、このdiplomaの制度は、卒業という肩書きにとらわれない、実力や実践を重視したものなのです。私は、これに非常に感心しましたし、日本との大きな違いだと思います。日本では、どこの音楽大学を卒業したかということが問われがちで、卒業よりも入学する方が大変で、一度入学してしまえば、よっぽど成績が悪くない限り、お情けで卒業させてもらえることもあるようですから。

ではここから、具体的な項目について説明したいと思います。

「入試」：器楽科の一学年から入学する場合は、その楽器への適性を重視し、まだ演奏することができなくても入学できます。しかし、課程の途中から入学する場合は、その段階によって課題があります。声楽科の場合は、一学年からでも入試がありますが、日本の音大の課題曲数も多く体の成長に伴わない大曲を要求されるような入試に比べればシンプルなもので、器楽同様、適性を重視した内容です。ただ、最近は声楽を学ぶイタリア人が減少しつつあり、留学生（特に韓国人など東洋人）が学生の半分近くを占めています。彼らのほとんどは、母国の音楽大学卒業後に留学するため、既に声楽家としても熟しています。しかし、文化の伝承という点で音楽院はなるべく、留学生とのいくらかの音楽的レベルの差があっても、イタリア人を入学させたいようです。

入試の時期としては、四月中に要項など入試の申し込み手続きを行います。試験の実施は、以前は六月でしたが、最近はほとんど九月以降になっています。

「授業」：音楽院は大学ではないので、一般教養の授業などはありません。声楽科の授業内容を例にあげてみます。

○一年次必修：principiante（プリンシピアンテ）
・ソルフェージュ
○二・三年次必修：corso inferiore（コルソ・インフェリオーレ）
・ピアノ
・合唱（音楽院によっては必要ない）
○四・五年次必修：corso superiore（コルソ・スーペリオーレ）
・Arte scenica（アルテ・シェニカ）（舞台芸術・演技）
・Letteratura drammatica e poetica（レッテラトゥーラ・ドランマティカ・エ・ポエティカ）（イタリア劇文学・詩文学）
・音楽史（音響学を含む）
・和声楽
・室内楽（音楽院によっては必要ない）

専攻の声楽レッスンは毎年あります。毎週一人一時間なので、三〇分二回か一回一時間にするかは先生と相談できます。一クラスの人数は最高でも一二人なので、先生が無理なく一人一人に接することができる人数と言えるでしょう（ちなみに東京芸大では一人の教官の生徒担当数は制限がないそうです）。

ところで、現在ミラノ・ヴェルディ音楽院は、ミラノ・ブレラ美術学校と協力して、卒業するときには現在の"diploma"ではなく、他国のように"laurea（ラウレア）（学士号）"を与えようと、現在大学化を進めています（設備・内容など現実はまだ伴っていませんが）。一方のブレラ美術学校は卒業研究に加えて卒業論文も作成するなど、音楽院よりは大学化を実践しており、学生も大学化のデモ活動をしています。このようなことから、最近では音楽院の位置づけを"posto-universitario（ポスト・ウニヴェルスィターリオ）（大学に属する）"とも言います。近年中の計画としては、例えば声楽科の学生などは、卒業時に演奏家コースか声楽教師コースに分かれ、小論文を課されるようになると聞いています。

「学費」：音楽院に学費はありません。皆自分で部屋を探します。しかし、イタリアの賃貸料は年々増加しているので部屋探しは大きな問題です。そのため、学生同士で（男女混合でも）アパートをシェアしているケースが多いです。あとはミラノの場合、「ヴェルディ音楽家憩いの家」という施設があり、数室の学生のための部屋が破格の値でありますが、家族に声楽家がいない学生は入居できないそうです。

「試験」：「授業」の所で記したように、声楽院の課程は三段階に分かれています。

・principiante
・corso inferiore
・corso superiore

入学後どの段階に入るかは決まっていますが、学年は確定していません。その状態を、"anno di prova（アンノ・ディ・プローヴァ）"と言います。そのため、学年を決める"esame di conferma（エザーメ・ディ・コンファルマ）"という試験が、二月か五月頃の年二回あります。これは、入学後二年以内に受けないと除籍になります。学年が決まった後は、必修科目の試験を受けなければいけません。筆記試験というのは和声学くらいで、あとは実技が一〇分程の口頭試験です。時期は六月、それに間に合わない人、又はパスできなかった人は九月に受けることになります。そして、いよいよ"diploma（卒業）"試験です。これは六月か九月どちらかを選ばなければなりません。

なお、各段階ごとの必修科目試験に合格しないと、学年を繰り返す（いわゆる：ダブる）ことは不可能なので、除籍になります。除籍になってしまった場合は、"privatista"としてやり直します。

「課外活動」：サークルなどはありません。音楽院の合唱団・オーケストラのみです。

「奨学金」：日本における日本育英会のような全国規模の奨学金はありません。学費のほとんどが国から援助されているため、学生の負担はわずかですし（年間日本円で約二万円）、授業の拘束時間が長い日本の大学と比べれば、自分で働くこともできるからではないでしょうか。よって、奨学金は各音楽院や大学が支給しているか、地域のロータリー・クラブなどによります。例えば、ミラノ・ヴェルディ音楽院は音楽院内でコンクールを実施し、賞金を奨学金として与えます。あとは、音楽コンクールに入賞し、賞金を得るようです。

「学生相談」："segreteria（セグレテリア）"という事務の人が担当しますが、普通、一人か二人のみで全学生と先生に対応するので、常に混乱しています。私もよく待たされました。

「就職」：卒業直後から演奏家として定職に就くことはイタリア人にとっても難しいようです。楽器奏者であれば、オーケストラに入団するケースが多いです。声楽家であれば、劇場の合唱団に入団ということもあります。しかし、特にオペラにおいて、ソリストとして活躍できるようになるまでには、主要コンクールに入賞しなければならなかったり、演目の契約を代行してくれるagenzia（アジェンツィア）（agency）とまず契約しなければならなかったりと容易ではありません。そのため、後進の指導にあたったり、他に収入源を確保するようです。

以上、音楽院やdiplomaの内容が多くなりましたが、必ずしもイタリア人がdiplomaにこだわっているわけではありません。何よりも実力、中身が伴っていなければ認めてくれない国だと思います。diplomaがなくても、コンクールで入賞しデビューする音楽家もたくさんいます。この本物を追求する姿勢は、音楽においてのみでなく、イタリア人の国民性だと思います。

●解説●

一人一人を尊重した教え方

林　康子
（東京芸術大学大学院教授）

私が初めて渡伊したのは、今からもう三〇年以上も前のことです。ちょうど今年はミラノ・スカラ座デビュー三〇周年でもありました。私生活においても、主人はイタリア人で声楽家であるG・ピリッチです。五年前からは、二人共に東京芸術大学で教鞭をとっていますが、それまではイタリアで子供二人と共に生活していたため、私にとってイタリアは第二の母国になりました。

主人も、ローマの音楽院声楽科でdiplomaを、同時にローマ大学で学士を得たようです。私の娘も音楽院のフルート科に楽器を演奏できる前に適性検査で入学し、通っていましたが、現在はミラノ大学に在学中です。音楽は相変わらず好きで、両親とは異なりクラシックではなくポップスを歌っています。

諸田さんの文章にあるように、イタリアの音楽院は実力優先で、入学より卒業するまでの課程の方が大変ですし、試験の結果や先生の評価によって、ダメな時はダメと生徒は現実を受け止めなければいけません。それは厳しいことかもしれませんが、逆に生徒一人一人を尊重した教え方とも言えます。

イタリアの夏休みは約三か月ありますから、例えば六月の試験がうまくいかなければ、その三か月の間に生徒はうまくいかなかった理由を考え、やり直すことができ、九月の試験で再挑戦することができます。そして、生徒にもストレスがたまることがないのです。だからイタリアでは、登校拒否やいじめも起こらないのではないでしょうか。

また、やり直してもやはりうまくいかなかった場合には、生徒は自分の選択した道が本当は自分に適していなかったとわかり、執着せずにあきらめもつけやすくなります。そんな時、音楽院の教育制度なら、音楽以外にも自分の可能性の幅を広げるための時間を持つことができますから、いろいろなことに柔軟に対応できる応用のきく人間に育つと思います。つまり、イタリアの教え方は、生徒の肉体的・精神的成長を伴ったもので、より時間とお金がかかる教育かもしれませんが、それぞれの生徒がどうしたら音楽家・一人の人間として成長していくかを考えた、人間本来の教え方と言えるでしょう。

日本でもイタリアでも音楽、特に演奏だけで生計を立てることは難しくなっています。イタリアでも特にオペラの世界は、若手声楽家を育ててくれる実験的劇場が減ってきて、小劇場から大劇場までの段階的ステップがありません。若いうちに運良く大劇場にデビューできたとしても、自分に合った演目を選んでいかないと演奏家寿命が短くなります。それが、イタリア人声楽科学生が減少している理由の一つになっていると思います。しかし、数年前からミラノ・スカラ座の研修所が再開され、私も修了しデビューのきっかけとなったので、これからも若手声楽家を育てる大きな助けになればよいと期待しています。